

# 彫刻道一筋に 情熱を傾けた 大器晩成の芸術家

## 小川 大系(おがわ たいけい) 穂高 等々力町出身

<大系が活躍した時代> 1898年(明治31年)~1980年(昭和55年) 享年81歳

1898	1929	1933	1934	1939	1940	1941	1945	1971	1980
明治31	昭和4	昭和8	昭和9	昭和14	昭和15	昭和16	昭和20	昭和46	昭和55
0歳		35歳	36歳		42歳	43歳	47歳	73歳	81歳
穂高(等々力町)に生まれる。本名は孝義という。	農業の傍ら、表具師の修行をする。	穂高神社の飾り物製作に携わり、「元寇」の頂点を極めた作品となる。	山本安曇の紹介により、北村西望、上京する。	図案や建築設計にも才を発揮し、西望の別邸の設計を行う。	「第1回 5回 帝国美術展」に、「天空ヲユク」が初展に選ばれる。	「第3回 文部省美術展」に、「鱒投網」が入選する。	穂高神社の狛犬原型を制作する。文展無鑑査となる。	戦争の後、東京へ戻らず、穂高に疎開し、その後も東京へ戻らず制作を続ける。	穂高駅前「登頂」を設置する。中宅における美術館の構想、彫刻家上條俊との合作、中田重太郎の制作による「中田重太郎」の制作、の

芸術家になったからには、いいものを作らなくてはならない。いいものを作るには、まず第一に自分を作ることだ。自分が正しく立派な行動をちゃんととっていないくは、作品ばかりいいものを作ったってだめだ。立派な自分を作れば、おのずと立派な芸術は生まれるものだ。

(自分に厳しく、自分に正直に生きた大系が晩年に語った言葉)



### 苦労を重ね、35歳から彫刻家としての出発した大系

家の破産によって美術学校への夢を断念せざるを得なかった大系でしたが、東京に出れば何とかなんと5回も上京を試みては、その都度兄に連れ戻されました。35歳の時、姉の親友であった工芸家山本安曇の妻の紹介で、安曇に弟子になるよう何度も勧められます。しかし大系はそれを「工芸のような細々としたものは俺には向きません。大きなものが作りたいのです。」と断ります。安曇は「大系というなかなかおもしろい男がいて俺の弟子にならないかと言ったらいやだと言った。」と北村西望(文化勲章受賞・長崎の平和像作者)に大系を紹介します。西望は「それはおもしろい人間だ。俺の所へ寄せ。」と言い、西望への入門が決まりました。この時、すでに大系は35歳という彫刻家としては遅い出発でした。入門した次の年に「天空ヲユク」が帝国美術展覧会に入選します。馬の制作を好み、それは師である北村西望よりも秀でていたと言われたほどの腕前でした。

### 【主な作品】 「自分から好んで苦労して、貧乏して、一生懸命作ることだ」(大系の言葉)

- 左から
- 天空ヲユク(昭9)
- 鱒投網(昭14)
- 水の精(昭49)
- 穂高会館所蔵
- 狛犬(昭15)
- 穂高神社
- 登頂 穂高駅前



「登頂」は父子像です。ザイルを持ち、優しく子の肩を抱く父の静、こだまを楽しむかのように山の空気をいっぱい響かせている少年の動。そこに山頂に立った山男のやさしくたくましい安曇人の姿を表しています。

### 故郷を愛し、安曇野の偉人を世に広めるために働いた大系

太平洋戦争で疎開のために穂高に帰ってきた大系はその後も安曇野に残り、制作を続けました。そして同郷の彫刻家と交わり、地元の中信美術会や信州美術会で展覧会を開いたり、後進の指導に当たったりします。また荻原碌山の顕彰活動の先頭に立ち、碌山美術館建設計画の中で活躍しました。郷土の碌山・山本安曇・松沢求策の顕彰活動にも尽力しました。

### 参考文献

- 安曇野市HP 「安曇野市ゆかりの先人たち」
- 「作品集 小川大系の世界」 郷土出版社
- 「孜孜として 安曇野・穂高町の人物群像」 穂高町立穂高中学校編
- 「安曇野の美術」 丸山楽雲／編
- 穂高会館・穂高駅・穂高の各小中学校等に作品展示
- インタビュー 画家征矢野久先生